

2013 年度 デザイン工学部

自己点検・評価報告書

2014 年 3 月 31 日

目次

第2章 教育研究内容・方法・成果	1
教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針	1
1. 現状の説明	1
(1) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか	1
2. 点検・評価	2
①効果が上がっている事項	2
②改善すべき事項	2
3. 将来に向けた発展方策	2
4. 根拠資料	2
教育課程・教育内容	3
1. 現状の説明	3
(1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	3
(2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。	3
2. 点検・評価	3
①効果が上がっている事項	3
②改善すべき事項	4
3. 将来に向けた発展方策	4
4. 根拠資料	4
教育方法	5
1. 現状の説明	5
(1) 教育方針および学習指導は適切か。	5
(2) 教育成果について定期的に検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びついているか。	5
2. 点検・評価	6
①効果が上がっている事項	6
②改善すべき事項	6
3. 将来に向けた発展方策	6
4. 根拠資料	6
成果	7
1. 現状の説明	7
(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか。	7
2. 点検・評価	7
①効果が上がっている事項	7
3. 将来に向けた発展方策	7
4. 根拠資料	エラー! ブックマークが定義されていません。
第4章 学生の受け入れ	9
1. 現状の説明	9
(1) 優秀な学生を集める工夫、活動について (高校訪問、オープンキャンパスなど	

具体的な活動)	9
(2) 留学生、女子学生増への対応策、方針について	9
(3) 再入学者増への対応策、方針について (学部のみ)	9
(4) 障がい学生、留学生、女子学生の受入れ	10
2. 点検・評価	10
①効果が上がっている事項	10
②改善すべき事項	10
3. 将来に向けた発展方策	10
第5章 学生支援	11
修学支援	11
1. 現状の説明	11
(1) 学生が学修に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう学生支援に関する方針を明確に定めているか。	11
(2) 学生への修学支援は適切に行われているか。	11
(3) 正課におけるキャリア教育への取組について	12
2. 点検・評価	12
①効果が上がっている事項	12
②改善すべき事項	12
3. 将来に向けた発展方策	12
4. 根拠資料	12
第7章 教員・教員組織	13
1. 現状の説明	13
(1) 大学として求める教員像および教員組織の編成方針を明確に定めているか	13
(2) 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。	13
2. 点検・評価	13
①効果が上がっている事項	13
②改善すべき事項	14
3. 将来に向けた発展方策	14
4. 根拠資料	エラー! ブックマークが定義されていません。

2013 年度デザイン工学部自己点検報告書

第 2 章 教育研究内容・方法・成果

教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針

1. 現状の説明

(1) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか

教育目標及び教育課程の編成・実施方針が、大学ホームページ(以下、HP)【資料 2-12】、「学修の手引き」【資料 2-13】(HP 上からも閲覧可)等を介して学内外に明示されている。教育方針の概要は以下の通りである。

- A. 幅広い知識を身につけ、地球的・歴史的視点で多面的に物事を考える。
- B. 技術の影響や効果、社会的責任を理解し、倫理観に基づき行動できる。
- C. 数学、自然科学、情報技術を理解し、応用できる。
- D. 科学技術や情報を活かして社会の要求を解決するデザイン能力
- E. 1つ以上の専門領域の知識・技術を修得して意匠力・設計力を身に付け、ものづくりの場で応用できる。
- F. 論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力
- G. 将来にわたる社会変化を見越してキャリアデザインを行い、学習を自主的・継続的に行う。
- H. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め、完遂することができる。
- I. チームのメンバーやリーダーとして活動し、チーム総体としてより良い成果を出す。

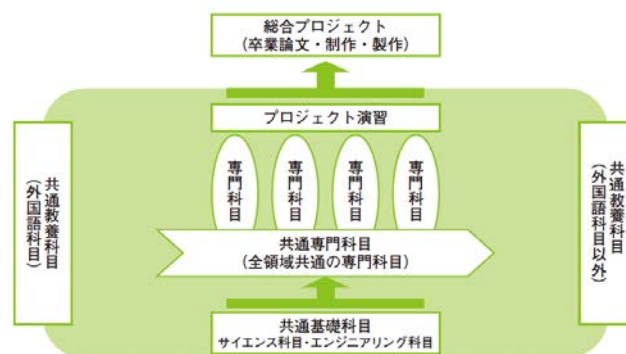


図 2.1 教育課程の編成

これに対して、教育課程の編成の全体像を図 2.1 で表現している他、この箇条書きの目標を実施するための具体的な内容との関係をカリキュラムマップで明示している。またその実施方針についても同手引きにおいて文章で詳しく示している。

2. 点検・評価

①効果が上がっている事項

「学修の手引」を精読した上で、学部・学科のカリキュラム編成および領域の履修モデルを理解して履修計画を立てる学生が多く、「学修の手引」が機能している証である。特に、平成 25 年度から導入したカリキュラムマップ【資料 2-13 p.14-15】は、学生のカリキュラムの理解促進に有効である。専任教員の理念・目標の共有と同様、FD 活動を通じた共通理解が進みつつある。非常勤講師においても担当科目だけでなく学部教育課程の編成方針の理解を促している。具体的な特記事項として、建築・空間デザイン領域は一級建築士受験資格要件科目の履修を学生に勧奨している。これが職能資格に直結する教育課程を保証している。一級建築士受験資格要件科目はデザイン系（計画、法規）とエンジニアリング系（構造、施工）をバランスよく包含しており、本学部の教育目標にも叶う。他の領域に関しても、基本・応用情報技術者資格や福祉環境コーディネーター・インテリアコーディネーターなどチャレンジできる資格を明示し、教育目標の実施によって広がる将来について明らかにしている。

②改善すべき事項

非常勤講師、兼任教員との間で学部のカリキュラム構成や科目配当、関連科目の内容共有が円滑に行われていない事例も存在したため、科目ごとに専任教員を連絡相談窓口とした。しかしながら窓口を初めて間もないため、さらなる充実が必要である。

プロダクトデザイン領域はデザイン系、エンジニアリングデザイン領域はエンジニアリング系に教育体系が偏っているのではないかとの意見も一部から挙がっているため、よりバランスある教育体系についても今後よく検討し、本学部の教育目標に照らし、科目履修における相乗りを勧奨したい。

3. 将来に向けた発展方策

専任教員、兼担・非常勤講師を交えた教育目標の共有に向けた取り組みが必要であるため、デザイン工学部の教育目標を達成するために必要な共通教養教育については、共通科目委員会を設置し、専門教員と連携して検討を進めている。また、カリキュラム再編についても継続的な議論を進めている。

さらに、先に「改善すべき事項」において記した、「よりバランスある教育体系についても今後よく検討し、本学部の教育目標に照らし、科目履修における相乗りを勧奨したい。」を共通系科目、専門科目双方に関して、目先のことだけでなく、より広い視野に立ってさらに進化させるための検討と活動が必要である。

4. 根拠資料

資料 2-12 芝浦工業大学ホームページ

資料 2-13 学修の手引（デザイン工学部 2013 年度版）

教育課程・教育内容

1. 現状の説明

(1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

教育課程の編成・実施方針に沿って授業科目を開設しており、それが体系的に編成されていることをカリキュラムマップを用いて明示している。また、各領域・分野毎に履修モデルを作成して学生たちに示している。

一方、学部開設当初はデザイン系とエンジニアリング系の融合を強く標榜した経緯がある。しかしながら現実を踏まえると、いたずらに「融合」を推し進めるよりも、もっと併置・共存を実現すべきであるとの考え方もあり、表面的な概念理解の段階を終えて、現在は、次のステップに向かっていると考えられる。これからは、人材・時間・空間のより適切な配分を検討していかなければならないように思われる。

(2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

カリキュラムの編成・実施方針に基づき授業科目を配置して授業を実施している。授業に関してはシラバスに「授業の概要」、「達成目標」、「授業内容（15週）」、「評価基準」を掲載している。

基礎的な科目を低学年次に、専門性や応用性の高い科目は高学年次に開講し、学習の積み重ねが効果的に発揮されるようなカリキュラム構成をとっている。初年次の導入教育では全教員参加による「総合導入演習」を小人数で実施する他、数学、物理、英語科目は習熟度別クラス編成を行う。1年前期の習熟度別クラス編成は入学時のプレースメントテストに基づく線形代数1、微積分学1、一般力学1、及びTOEICテストに基づく総合英語である。英語は毎学期のTOEICテストに基づき1年後期、2年前期の科目も習熟度別クラス編成を継続している。さらに学習サポート室を設置し、数学、物理、英語の担当教員が所定の曜日・時間帯を設定して、個別質問などを受け付けるほか、必要に応じて学習サポート室主導で補習クラスを編成している。2年度以降の教育では、領域・分野毎の専門性の高い講義及び演習を実施している。特に3年次の前・後期に実施する「プロジェクト演習」では、領域・分野毎に高度な専門知識と実践を学び、さらにチームでのプロジェクトの推進ができるような指導を実施している。

平成22年度には高等学校教諭第1種（工業）の課程認定の申請を行い、卒業生の教職への道を拓いた。また、建築・空間領域のカリキュラムでは国土交通大臣の指定する建築士試験の指定科目として69単位が認定されており、建築・空間デザイン領域の履修モデルに沿って必要科目の単位を取得することで一級建築士は最短2年間の実務経験を経た後に、二級建築士は卒業と同時に受験資格を得ることができる。以上により、各課程に相応しい教育内容を提供している。

2. 点検・評価

①効果が上がっている事項

カリキュラム編成・実施方針に基づき計画された授業科目は適正に開講されている【資料 2-36】。習熟度別クラス編成、低習熟度学生向けクラスの増設によって全ての学

生が到達目標を達成すべく工夫を行っている。カリキュラムの実施状況については平成 21 年度から平成 24 年度までの教育課程の履行状況【資料 2-37】を文部科学省に提出、大学ホームページでもその内容を公表している。

②改善すべき事項

時代の変化や技術の進歩が続く中で、年度毎に学生の学力や性質にも差異がある。また教員の退任・新任もあることから、毎年、教育内容の改善を行っており、今後も継続的な改善を要する。

また、デザインを学ぶのに必要な人文系の教養にいかにつれさせていくかも大事な課題であるように思われる。

一方、共通教養科目の内容構成には少し偏りが存在するように思われる。社会学系科目がバラエティに富む一方で、デザインや建築を学ぶのに重要であると考えられる人文系教養科目があまり用意されていない。1 - 4 年開講となっている共通科目が、実際には大宮か芝浦のどちらかでしか開講されておらず、結果として学生が履修機会を失うことがあり得る。しかしながら、履修人数が必ずしも確保できない科目を全て大宮及び芝浦で開講することは得策ではなく、最適な開講について注意深く検討していく必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

設置計画に基づくカリキュラムを履行する中で、各科目群の講義・演習科目の配置が適正か否か、科目の履修状況も踏まえながら確認を行い、編成の方針と体系を評価していく必要がある。その再編・変更にあたっては、現行カリキュラム編成の方針と体系、変更の必要性と妥当性を評価した上で措置する。

特に、デザイン工学部では、「講義と演習の連動」が重要なケースが少なくなく、長い将来を見据えた連動の実現を求めていく必要がある。

さらには、重要科目の大宮と芝浦の 2 キャンパスでの同時並行開講について、前記の「改善すべき事項」で触れた問題点を考慮に入れながら実施していく必要がある。

4. 根拠資料

資料 2-36 デザイン工学部授業時間割（2013 年度）

資料 2-37 設置に係る設置計画履行状況報告書（平成 24 年度）

教育方法

1. 現状の説明

(1) 教育方針および学習指導は適切か。

デザイン工学科の教育目標は、社会が求める「あるべき姿（当為）を構築する設計科学技術」を身につけたデザイン能力人材の育成にある。設計科学技術を重視して工学的素養を身につけ、同時に他の分野と協力・協働し、社会的・産業的な幅広い視点からのデザイン能力を身につけるために必須の態勢として、3つの教育領域に4分野を置いている。

各領域のどこに焦点を当てて学習すべきか、将来どの仕事に携わるかなど、技術者としての職業意識を養うような履修指導を実施している。履修にあたり、学生が将来像を意識して学修できるように、デザイン工学を俯瞰的に学びつつ、同時に1年次から領域のカラーを持たせたカリキュラムとしている。また、卒業後の進路に対応した履修モデルの提示を行い(HP上からも閲覧可)、養成する人材を明確にし、学生が主体性をもって4年間の学修計画をたてられるようにしている【資料 2-58、2-59】。

教育目標の達成に向け、講義、演習、実験・実習、体育実技等の授業形態を設定し、各授業科目の単位は大学設置基準第21条並びに芝浦工業大学学則第16条に基づき次のとおり設定している。

- ① 講義については、毎週1時限15週の授業をもって2単位とする。
- ② 演習、実験・実習、体育実技などについては、毎週1時限15週の授業をもって1単位とする。
- ③ 総合プロジェクトについては、4年次前後期を通じた研究活動をもって6単位とする。

教室内の授業のみでは不足する学習量を自習時間で補えるよう、講義科目についてはシラバスに予習内容を記載している。

半期に履修できる単位の上限は24単位である。

(2) 教育成果について定期的に検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

半期毎に授業アンケートを実施し、学内のネットワーク上でその結果を参照できる仕組みとなっている。また、毎月、FD研究会を実施し、専任教員が担当科目の講義・演習方法等を紹介、意見交換を行う場を設け、相互理解を深めるとともに、教育内容・方法の改善に努めている。さらに共通科目の検討を中心に行う共通科目委員会を学科内に組織し、定期的に委員会を実施している。同委員会では、授業の教育成果を踏まえつつ、今後のカリキュラムや担当者の選定、教育内容・方法にまで踏み込んだ議論を行っている。また今期より、ルーブリックを試行し、学生自身による学習達成度の評価を教育内容、教育方法の改善に取り組むための検討を開始した。対象科目は、入学間もない1年生を対象とした総合導入演習と、最終学年生を対象とした総合プロジェクトである。

2. 点検・評価

①効果が上がっている事項

授業アンケートの結果は FD 委員会による優秀教育賞候補者の選考に活用している。FD 研究会は定期的実施されており毎回 8 割程度の教員が出席している。デザイン工学部デザイン工学科は一学部一学科でありながら、互いに異なる専門性を持つ教員が教育研究に携わっているため教員間の相互理解が不可欠であり、FD 研究会における検討、意見交換は、自らの担当科目の授業改善につながるのみならず、学部理念・目的の検証、実現にむけた取り組みについての理解の共有に役立ち、組織としての教育内容・方法の改善につながっていると考えられる。

大宮キャンパスにおける教育開始にあたり、芝浦キャンパスへ移る 3 年次への進級に際して取得単位の制限を設けたが、成績不振者の早期発見と学習指導を可能とするよう、これまで年度単位で行っていた保証人を含む成績不振者との個別対応を半期に 1 度とし、クラス担任によるフォローの体制を充実している。

②改善すべき事項

ルーブリックの利用方法について、学生、教員双方に理解が広まっている状況にはまだない。現状では異なる科目間で一つのルーブリックを継続的に利用して行くシステムになっておらず、学習成果を長期的に一つのスケールで評価して行く仕組みが構築されていない。また学内ネットワークを利用したルーブリック入力システムの設計にも多くの課題があり、ルーブリック作成・入力の操作に制約がある。

学部規模が小さいため、教員・学生ともに内向きに留まる傾向がある。2011 年度以降入学生は大宮キャンパスでの課外活動など他学部との交流経験を有する割合が高い。

3. 将来に向けた発展方策

ルーブリックについては入力システムの改善を図るとともに、試行結果をもとに活用方法、評価項目の再検討、複数の授業間でのルーブリックの共有など、教育内容・方法の改善につなげる検討を行う。専任教員のみならず、非常勤講師、学生、また志願者に対しても学部・学科の理念・目的とともに教育方法の特徴をアピールし、学内他学部他学科との違いについて理解を促す。FD 研究会は教員単位の相互理解が一巡した後の効果的なプログラムを設定し、組織的な教育内容、教育方法の改善につなげるための目標設定が必要である。

4. 根拠資料

資料 2-58 芝浦工業大学ホームページ

資料 2-59 学修の手引（デザイン工学部 2013 年度版）

成果

1. 現状の説明

(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか。

完成年度を終え、2009年度入学の第1期生への学位授与を行った。新設学部としては、初の卒業生を送り出したこと、また高い進路決定率が得られたこと自体が、まずは教育目標に沿ったシステムが実践された成果であると考えられる。就職率は93%であった。教育成果の評価に関しては、4年次の必修科目である「総合プロジェクト」を対象としてデザイン工学科の「学習・教育目標」にしたがったアウトカムズ、ルーブリックを設定、2010年度入学の第2期生から、これをPDCAサイクルにつなげるパイロットスタディを開始した。2013年度からは1年次「総合導入演習」においても実施し、4年間の学部教育における導入時および完成時における評価システムの効果的運用に取り組んでいる。

2. 点検・評価

①効果が上がっている事項

2013年卒業の第1期生の就職内定率は93%であり、3学部中最高であった。学位授与を行ったこと、高い就職率を達成した点で、教育目標に沿った成果が上がっていると考える。通年で行う総合プロジェクト（卒業研究）では運営基準により、定期的な中間発表、審査を設けた他、最終審査の方法、主査、副査による評価基準を定め、審査結果の客観性向上が図られた。建築・空間デザイン領域では各年度に授業の成果をまとめ全学生に配布する年報（イヤーブック）を編集、発行しており、学生の修学の指針、目標として活用されている。とりわけ1年次から3年次のデザイン演習については各学年の優秀作品を掲載し、学生が自身の達成度を具体的に測る指標となっている。

②改善すべき事項

学部全体としての就職率は他学部を若干上回る実績であったが、領域・分野別にみると高低の差があらわれている。また、大学院進学率が相対的に低く、研究室によっても大きな差が生じている。第1期生は上級学年がおらず、研究室等での大学院生の研究や生活を実感することが難しく進学意欲に繋がらなかったことも指摘されている。

ルーブリックを活用した教育成果の評価、確認のシステムは未だ始動期にあり、具体的な教育成果の確認の多くは、個別の科目、専門領域の範囲に留まっている。

卒業生を対象にした満足度調査を始めて実施したが、その結果は大学平均をやや下回るものであった。教育成果との関係について分析が必要である。

3. 将来に向けた発展方策

ルーブリックによる評価システムについて、実施を始めた科目の成果を得ながら、学部全体の教育課程の評価につなげたい。全学で取り組む「PDCA化とIR体制による教育の質保証」に学部長他、学部教員が委員として参加、これと連動することで早期に評価システムの確立を目指す。

卒業時の学生満足度調査結果については新設学部への期待が過大であったという解釈もあるが、2年目以降、継続的に観察・分析を行い、教育成果との関係を見極めるとも

に、教育成果と相関が高い項目の満足度を向上させるための取り組みを進める。また、芝浦キャンパスにおける1学部1学科の構成の成果が内向的にならぬよう、教育・研究成果の学部外・学外への発信を積極的に行い。様々な外部の目に教育成果を晒すことは一定の緊張感を保ちながらも教育システムのPDCA化に効果的である。

第4章 学生の受け入れ

1. 現状の説明

(1) 優秀な学生を集める工夫、活動について

(高校訪問、オープンキャンパスなど具体的な活動)

オープンキャンパスでは、ほぼ全教員を挙げて企画・運営を行い、積極的でコミュニケーション能力の高いデザイン工学部生に協力を求めて優秀な学生の獲得に努めている。新設学部であるだけに、知名度が低く、実績もわずかである点を意識し、保守的なルーチンワークとならないように努めている。一方、高校への模擬授業、または、理系講座への参加も積極的に行うほか、夢ナビライブ(FROMPAGE 主催、文部科学省後援)等の巨大な模擬授業及び大学紹介の機会も積極的に参加している。現在、ホームページは大学を PR する上で、実質的な表玄関にも位置づけられる。学部・学科の位置づけや教育方針はもちろんのこと、研究室 HP の開設も少しずつではあるが増加している。入学志願者が比較的少ないエンジニアリング領域においては分野毎の PR 動画も用意している。

(2) 留学生、女子学生増への対応策、方針について

現在、ハイブリッド・ツィニングプログラム制度を利用して入学した大学院留学生が 3 名、芝浦キャンパスに通学している。デザイン工学部の学部生と同じ研究室に属し、日本人学生と共に研究活動を行う例が継続している。また、学部生の演習に TA として参加する例も出ている。これらは日本人学生に良い影響を与える他、留学生にとっても孤立することなく日々の生活を過ごす結果となっている。大学としてグローバル化の推進に努めており、学部としても留学生の増員を図りたい。学部の留学生の入学については、現状は、一次選考(出願書類および日本留学試験の結果による選に合格した者のみ二次選考(英語・面接)を実施し、2013 年度に 1 名入学している【資料 4-25】。女子学生については、デザイン工学部では他学部の過去 5 年平均(工学部 11%、システム理工学部 15%)に比して、過去 5 年平均 24%と女子学生比率が多い傾向にある。その中でエンジニアリング領域だけは 11%と少なく、女子学生増への対策が必要である【資料 4-25】。具体的には、オープンキャンパスに学部女子学生を配置し、女子高校生や保護者に接して相談に乗ることを積極的に行う他、大学パンフレット、学科パンフレット、学部ホームページ上の紹介動画を用いて理系を志向する女子学生の獲得に努めている。

(3) 再入学者増への対応策、方針について(学部のみ)

大学全体の大学院進学率が 30%前後であるのに対し、デザイン工学部の進学率は 20%前後となっている。技術の高度化やグローバル化を鑑みると、大学院に進学する学生を増やすことは重要であり、デザイン工学部にとっても使命であると考え。4 年生の学内進学及び一次募集での一般入試が終わっても、進学も念頭に置きながら就職活動を続ける学生もおり、年間を通して進学指導を進める。3 年生についても、就職ガイダンスにおいて進学の説明及び奨励を行っており、就職指導と進学指導はセットで行っている。再入学者については、第 1 期生が社会に出たばかりであるため前例がないが、卒業後も大学院に戻って来る道があることを知らせていく必要がある。

(4) 障がい学生、留学生、女子学生の受入れ

今年度、はじめて障がい学生の受け入れを行った。入学前に、クラス担任、共通科目教員、所属予定の領域の教員、及び学生課職員との合同面談を行い、何が考慮すべき事項かの意見交換を行った。また、受け入れ後のアドバイザー教員を定め、定期的な面談を行うこととした。この受け入れ態勢は継続し、必要に応じて改善に努める。留学生については、日本語の問題がない場合は特段の受け入れ態勢は要しないと思われるが、今後、問題と判断、或いは問題となると予測される場合は、適宜対応していく。女子学生については、既に51名もの女子学生が在籍しており【資料 4-25】、特別な受け入れ態勢を要しないが、ハラスメント問題に注意をしながら進めていく。現在、ハラスメントに対しては毎年、定期的に説明会が開かれ、ハラスメント発生時の連絡相談窓口も指定され、学生に通知されている。

2. 点検・評価

①効果が上がっている事項

過去5カ年の入学試験の状況は順調に推移しており、これまで入学試験の実施方法、内容について大きな変更は行っていないが、2012年度からAO入試は中止した。今後は、入試委員会において、入学後の学生の履修状況、成績についての入試種別毎の分析等を進め、アドミッションポリシーにマッチする優秀な学生確保に向けた改善策について検討を進める。

②改善すべき事項

学部全体の入試状況が順調な中でも、エンジニアリング領域の学生の応募状況は、他の領域の1、200人前後の応募と比較して900人前後であり【資料 4-25】、十分とは言えないため、受験者増に向けて、PR活動の改善が必要である。

また、他学部類似学科との差別化。競争というよりも学内での役割分担、棲み分けについて明確にしていく必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

デザイン工学部の名称に含まれる「デザイン」の訴求力を活かしながら、デザイン力を備えた「デザイン工学」技術者養成を目指す理念を浸透させるため、志願者に対して理念・目的、アドミッションポリシー【資料 4-26】を十分に伝えるための取り組みを進める。

大学ホームページでの各研究室ページの整備および定期的な更新が必要である。多くの受験生はインターネットによる情報収集を行っており、内容の充実が教育内容の伝達、学科のプレゼンスの向上にとって極めて重要である。

また、今後の障がい学生たちの受け入れに関する、しっかりとしたガイドラインの作成を行う必要がある。

4. 根拠資料

資料 4-25 大学基礎データ(2013年度)

資料 4-26 芝浦工業大学ホームページ

第5章 学生支援

修学支援

1. 現状の説明

(1) 学生が学修に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう学生支援に関する方針を明確に定めているか。

アドミッションポリシーの中にも、「デザイン工学部のすべての教員は学生が満足して学習できるよう最大限努力します。」の文章がある【資料 5-16】。その実践のため、大学はハードウェアとしての設備を整えると共に、ソフトウェアに当たる様々な支援を行う。

1) ハードウェアとその運用

演習科目には大学院生のティーチングアシスタント (TA) を配置、2012 年度の実績は 23 科目、のべ 53 人 2640 時間である。大宮キャンパスにおいては施設新設、改修が実施され、設備の充実は図られたが、デザイン工学部の 1、2 年次教育を実施するにあたって無理のない時間割編成が可能となるように、大学全体で、時間割編成、教室利用を考えるべく協議を行ないながら、一層の効果的な施設利用計画を立案している。同時に、大宮キャンパスで授業を受ける 1、2 年次学生と芝浦キャンパスに研究室を持つ教員とのコミュニケーションが授業時間以外にも保てるように現在は、デザイン工学部専任教員控室が用意されてはいるが、非常勤講師も同居するスペースとなっており、デザイン工学部専任教員が在室して学生指導にあたるスペース確保も必要である。

2) ソフトウェアについて

学生が学修に専念できるためには、しっかりした大学設備の下で、適格なカリキュラムとその適正な実施が必要である。さらに学生たちがそのカリキュラムの意味を理解し、確実に履修するためには、分かり易い履修登録システムや無理なく効率的な時間割の作成、オフィスアワーの明確化、信頼性の高い試験の実施と成績の公開が必要である。また、学則の明確化、学費・奨学金の適正な設定や運用が求められる。これらは全て HP 上にも公開され、学生たちに周知されている【資料 5-1】。また、各学期のはじめには、学年毎のガイダンスを学年担任が実施し、必要に応じて学生との面談を重ね、安定した学生生活を送れるように努めている。

(2) 学生への修学支援は適切に行われているか。

教育・研究面では、ガイダンス、面談を学年毎に担任教員が行う他、領域・分野毎にも適宜実施している。また、履修・登録・学費等、日々の生活支援を学生課が実施し、縦からも横からも学生の修学支援が厚く行われている。また、HP の充実そのものが強力な修学支援として機能している【資料 5-16】。

またデザイン工学部ではアドバイザー制度を設けて、専任教員が 1 年生に対する学業等に関するアドバイスをを行う活動を実施しているが、2013 年度からは上級生の中から学生アドバイザーを募り、アドバイザー制度の充実を図った。

一方で、成績不振者に対し、クラス担任が個別面談を適時行っている。場合によっては保護者を交えた話し合いの機会を設けている。面談の際には記録を残し、担当者が変わっても引き継ぎなどに支障が無いように対応している。

(3) 正課におけるキャリア教育への取組について

「学修の手引き」にはキャリア系科目について節を設けて、教育プログラムとキャリア教育の必要を説明している。そして具体的に、共通教養科目の中に、キャリア系科目(演習)科目として、「キャリアと就職」、「キャリア形成コミュニケーション」、「キャリア・デザイン」の3科目を設け、学生全員に履修を推奨している【資料 5-17】。

一方、デザイン工学部は実務出身の専任教員が多いこともあり、通常の授業の中でもキャリアに結びつく内容をしばしば話している。さらには、特別講師に本学出身の実務者を招いて教育にあたっている。

2. 点検・評価

①効果が上がっている事項

働くと言うことを考え、エンジニアとして働くこと、会社・企業とは何か等の課題について講演を聞く他、グループワークを通して自ら調べ、考える教育を実践しており、就職に対する知識を増やすと共に心構えを身につける上で効果が上がっていると考えられる。

一方、建築・空間デザイン領域では1期生に比べて2期生の内定先が多様になったことが挙げられる。たとえば公務員建築職や金融などに内定先が広がっている。これはねらい通りの成果であると考えられる。

②改善すべき事項

キャリア系科目は、現在のカリキュラム編成当時、他学部在先駆け設置した。教員にとっても初の取り組みであったため、学外の人材を招聘し、学内の教員がノウハウを吸収・蓄積しようとしたが十分には達成できていない。今後対策について見直していく必要がある。

3. 将来に向けた発展方策

デザイン工学部の共通科目委員会において、キャリア教育の内容や進め方についての議論を定期的を開始した。新しいエンジニアを育成するために、施策を講じているところである。

4. 根拠資料

資料 5-1 大学ホームページ キャンパスライフ (学生生活総合保障制度)

資料 5-16 デザイン工学部 HP

資料 5-17 デザイン工学部 学修の手引き P41

第 7 章 教員・教員組織

1. 現状の説明

(1) 大学として求める教員像および教員組織の編成方針を明確に定めているか

デザイン工学部は実務経験豊富な教員を多数配置し、デザイン工学の幅広い分野での実践的教育に対応できるよう教員組織が編成されている。また、学部・学科のカバーする領域分野、カリキュラム設計に適合するように、教員の専門分野、各領域学生定員と教員数のバランスを考慮している。学部設置にあたって理事会の下に組織された新学部新学科開設準備委員会が開設時の教員組織編成を行った。学部長、学部長補佐 1 名、学部長室員 2 名（領域幹事兼任）の 4 名によって学部長室を構成、事務職員を加えた学部長室会議を毎月 2、3 回開催し、短期的な課題および中長期的課題への対応や方針について議論を行っている。学長室との連携を図るため、学長補佐を務めるデザイン工学部教員も学部長室会議のメンバーとして加わっている。教授会は 8 月を除き毎月 1 回開催している。教授会規則により教授会常設委員会として資格審査委員会、教務委員会、単位認定委員会、FD 委員会、入試委員会、共通科目委員会を設置している。一学部一学科のため構成員は同一であるが、学科会議もほぼ毎月 1 回開催することで教職員間の密な連携体制を確立している。また、平成 24 年度から学部長室員を増員すると共に、領域・分野幹事会議を設け、教授会・学科会議運営の効率化を図った。

(2) 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。

教員の採用における候補者選考、昇格は教授会構成員のうち教授によって構成される資格審査会議の審議を経て行われる。専任教員の資格基準については全学的な規程化と公開に向けた取り組みと歩調を合わせ、教員資格審査委員会において検討を進め、資格基準を作成し、規程化した。これに基づき、2010 年度に准教授から教授への昇格を 1 件審議・承認した。特別任用教員、非常勤講師の採用にあたっては公募による候補者選考、特別任用教員の場合は理事会に置かれた教員人事委員会の承認を経て、その後資格審査会議による審議が行われている。2012 年度には専任教員の退職、異動に伴い、4 名の新規採用手続きを行った。

2. 点検・評価

①効果が上がっている事項

教員組織の編成については専門分野、年齢構成からみてほぼ適正であるといえよう。ただし本学他学部と比較して専任教員の絶対数、学生 1 人あたり教員数が少ないこと、共通教養系教員、若手教員が相対的に少なく、領域・分野別の学生 1 人あたり教員数にもやや偏りがある。2011 年度に助教 1 名を採用した。また、共通教養系の科目における非常勤講師担当科目の比率が高いこと、これらをマネジメントする共通教養系教員の負荷が高いことから、2012 年度に英語担当、数学担当の 2 名の准教授を採用して改善を図った。さらに 2013 年度には、4 人の専門教員を採用した。その結果、年齢構成のバランスが大幅に改善した。

教員採用における候補者選考方法については、全学的な教員採用手続きの規定化、公

開に向けた取り組みと合わせ、本学部においても選考ルールを2010年度に規程化した。教員の資質向上への取り組みについては企業等出身の新任教員を積極的に研修に参加させ、最近の大学および大学を取り巻く状況についての理解を促している。FD活動も小規模学部としては活発で、FD研究会には毎回9割以上の教員が参加し、学部教員間の相互理解が次第に進みつつある点で効果を上げている。

②改善すべき事項

教員の退職・異動・新任任用により、学部構成員も変わり、またデザイン工学部が置かれている環境も変化していく中で、上記のような改善は継続的に行う必要がある。

これからを考えた場合、年齢構成の平準化。女性の登用。英語力の向上を狙った教員構成を視野に入れた採用を考えていく必要があると考えられる。後者については、より一層の国際化、すなわち、外国人教員の採用を積極的に行うことなどが考えられる。

3. 将来に向けた発展方策

小規模学部にあっても共通教養系科目は一定の科目数を配置する必要があるが、共通系教員の増強には限界があり、多様なメニューの科目をデザイン工学部単独で充足しようとすると非常勤講師比率の改善は望めない。各学部における共通教養科目の位置づけはそれぞれに異なるため、協議を重ねながら他学部との共同開講の可能な科目にあってはこれを拡充する方向で検討する。

教員の資質向上については、学外研修への教員派遣を引き続き積極的に行うとともに、FD活動についても継続的实施を組織的に推進する。

また、デザイン系教員とエンジニアリング系教員の量質バランスについても、注意深く検討していく必要がある。

さらには、海外への教員の派遣による国際化や教育の質の向上を実現していきたい。